

花き(バラ)に関する現状と課題

山形県鮭川村

鮭川村の概要

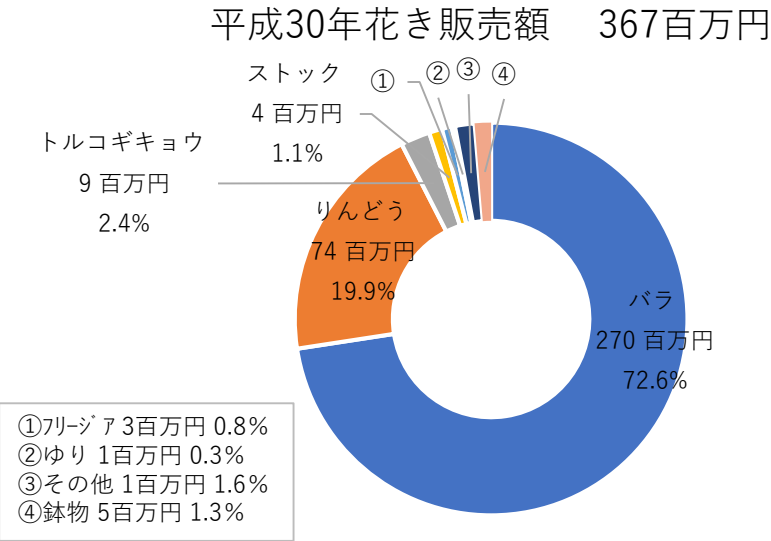
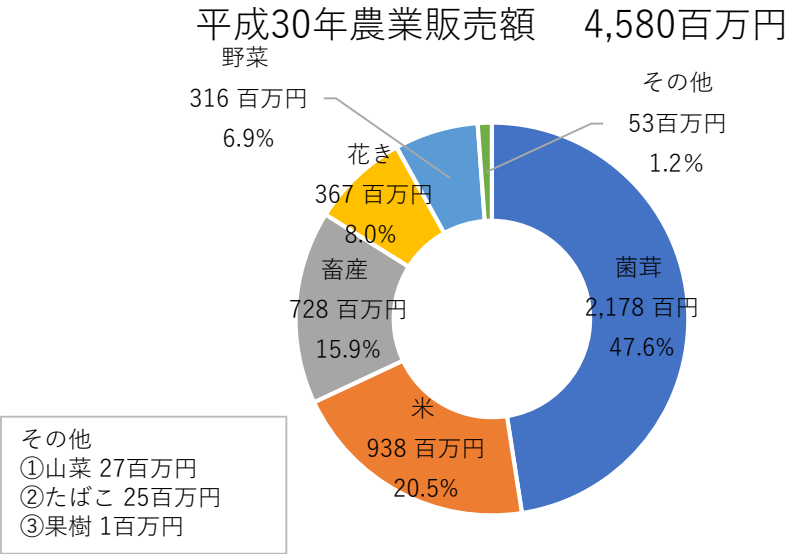
山形県の北部、最上圏域北西部に位置する人口約4,200人の農山村で、村の中央部を1級河川鮭川が貫流し、秋になると鮭が遡上する。名称の由来は、古くから多くの鮭が見られたことに由来する。



農業の状況

村の基幹産業は農業であり、平成30年の農業販売額は4,580百万円で、菌茸2,178百万円、米938百万円、畜産728百万円、花き367百万円となっている。花きにおける販売額のうち、バラ270百万円（289万本）、りんどう74百万円（147万本）となっており、2品目で93.8%を占めている。

菌茸・バラは村の特産物となっており、菌茸の生産量は山形県全体の約60%、バラ・りんどうの生産量は約16～17%を占めている。



花きの生産の状況

冷涼な気象条件を活かした花きの生産が行われており、平成30年の販売額は367百万円で農業販売額の8%を占めている。生産量は、切り花462万本、鉢物10万ポットで、販売額における切り花の割合は98.6%となっている。

バラの生産の状況

バラについては2つの農業生産法人により村内4カ所で生産されており、夏バラは品質が優れ市場から高評価を得ている。特にA社では、約70種類のバラを生産し平成30年は207万本出荷している。バラは一年間を通して毎日収穫され、多い日には一万本を超える。収穫したバラは冷蔵庫に保管され、2～3日でお荷している。

出荷の状況

バラについては、生産者がそれぞれ直接市場へ出荷している。
(りんどうについては、約54%が系統出荷で、約46%は生産者が直接市場へ出荷している。)
市場のせりに合わせ、火曜日・木曜日・日曜日の週3回のお荷を行っている。
お荷の割合は、市場が7割、市場外(仲卸・スーパーなど)が2割、自社販売が1割となっている。
市場へのお荷の内訳は、東京(大田市場花き部)が4割、大阪(なにわ花いちば)が4割、地方市場(福島、埼玉、栃木、茨城、静岡など)が2割となっている。

出荷の形態

・段ボール箱でのお荷

バラのお荷のうち、約72%が段ボール箱でのお荷となっている。段ボールのサイズは、90cm、70cm、50cmの3種類(縦箱、湿式)を使用している。

バラの規格は、80～40cmの10cm刻み、5種類でのお荷となっている。トラックに立て積みしてお荷している。

90cm(規格80・70cmのバラ) 70cm(規格60・50cmのバラ) 50cm(規格40cmのバラ)

・容器(バケツ・台車)でのお荷

バラの規格については同一であるが、台車に容器(バケツ)を20個または40個を乗せお荷する。

段ボール箱	容器（バケツ）
複数のサイズの箱が必要 箱の組立て、箱への詰込みに労力を要する （収穫後に冷蔵庫へ保管し、出荷に合わせ箱の組立て・詰込み） 切り花を保管する冷蔵庫の面積が少なく済む	容器への詰込みが容易 台車が必要となる （収穫し、規格別に容器に入れ冷蔵庫に保管） 容器（バケツ）に入れ冷蔵庫に保管するため冷蔵庫の面積が必要となる
1台のトラックで輸送できる本数が多い 箱の積上げが可能（2段～3段積み）	1台のトラックで輸送できる本数は箱に比べ少ない
容器と混載した場合、箱が濡れる可能性がある	箱と比べ花に傷がつくリスクがある
市場での転送は容易	市場で転送しにくい
最終的に箱の廃棄が必要となる	容器は再利用が可能となるが、現在は回収が課題となっている

輸送の際は、段ボール箱・容器いずれも立て積みで行っている。品質を維持するため立箱を採用している。横箱の場合、切り花の切り口が完全に水に浸かった状態を維持できるか不安が残る。（切り口が水から離れると花持ちが悪くなるほか、市場で受け入れてもらえない場合もある。ただし、水が必要でない切り花もある。）



輸送について

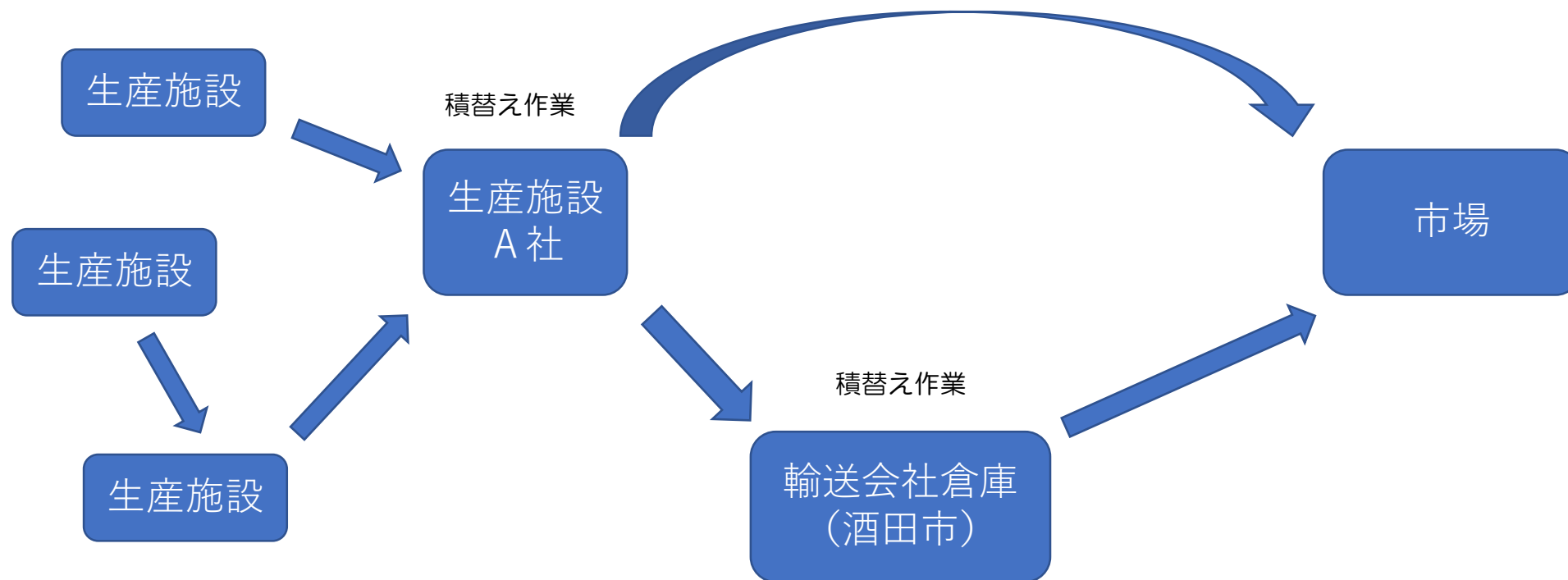
輸送については、個々の生産者が輸送業者へそれぞれ委託し、集出荷を行っている。

村内のバラについては、生産者が2社のため、同一の業者と契約しており10t車（冷蔵車）で輸送している。（夏は冷却、冬は凍結防止）

集荷に際しては、村内や近隣市町村から集荷し、A社で積替えを行い出荷している。

市場の状況等により、産地から直接市場へ輸送される場合と輸送会社倉庫に運搬し、一時保管し積替えのうえ市場に輸送する場合がある。

- 東京方面への輸送は、東北中央自動車道・東北自動車道を利用し、所要時間は7時間程度
- 関西方面への輸送は、北陸自動車道を利用し、所要時間は10時間程度



流通容器や台車の統一について

現在、村内の2つの生産者でも流通容器の形態は異なっている。

切り花は、市場や消費者のニーズに応えるため、品種や規格が多様化している。

生産者としては、出荷の規格などに合わせ品質を保持する観点やコスト（トラックへの積載量も含め）・市場での転送の面などから出荷容器をそれぞれ選択している状況にある。

○バラの場合、基本的にトラックに立て積みし輸送しており、市場の状況によりその種類も混在し、数量も変化するため、パレットの活用は厳しいのではないかと意見であった。

○容器（バケツ）での出荷の場合段ボール箱に比べ、トラック1台に積載できる量が少ないことや台車が必要となること、容器（バケツ）の大きさや保管する冷蔵庫の面積の課題などがある。

地域での集荷について

生産施設は、山間地に点在していることや、集荷に使われる地方道は幅員が狭く曲がりくねっているため、Uターンやすれ違いが困難等の理由で、集荷に時間を要している。いかに、集荷・積替えの回数や時間を減らすことができるかが課題となっている。

生産者間の中でも集出荷の効率化を図るため、共同で集出荷を行う組織が必要ではないかと意見も出てきている。

村としては、10t車などの大型車での集荷は困難であったことから、トラックの転回所を設置するなど対応している。

広域輸送について

首都圏へいかに効率的な輸送できるかが課題となっている。冬期間は降雪により輸送時間が長くなる。輸送時間の短縮やトラックへの効率的な積載が必要。

現在は鮭川村や隣接する新庄市などから集荷し、A社で積替えなどしながら市場へと輸送しているが、すべてのトラックが満載の状態ではない。

産地として

生産者は、消費者に届いた段階で最も良い状態となるよう、より高品質なものを消費者に届けるべく輸送にかかる時間等を考慮しながら生産・出荷を行っている。こうした取り組みが商品の付加価値を高めていると考えられる。

村としては、意欲ある生産者をいかに増やしていくか、地方の農業をいかに持続させるかが今後の重要な課題ととらえており、商品の付加価値を高め、生産者の所得が向上することにより、さらに雇用の創出が期待され、地域産業の持続的な発展に資するものと考えている。

今後の課題

- ・流通容器（バケツ）や台車の規格の統一について

流通容器の規格や回収するシステムについて、生産者から小売店まで統一した規格の構築が可能となるか。

- ・地域内の集荷の効率化

生産施設が点在するため、集荷・積替えに時間を要していることから、効率的に集荷できる拠点施設・体制の整備。

- ・輸送時間の短縮及び効率的な輸送

高速交通網の整備による輸送時間の短縮。輸送時間が短縮できることにより、収穫時間が増え、出荷量の増加が見込まれる。トラックのサイズと積載量のバランスが取れるロットの検討。